

Title	信仰と倫理：『近代日本キリスト者の信仰と倫理』補遺
Author(s)	鵜沼, 裕子
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume16：56-65
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2817
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

信仰と倫理

——『近代日本キリスト者の信仰と倫理』補遺——

鵜沼裕子

昨年三月に聖学院大学出版会から『近代日本キリスト者の信仰と倫理』と題する論文集を公にしたが、ここへの補遺として一文をしたためることとした。その理由は、本書の問題意識と考察の視点については同書の序章に一応述べたのだが、本の表題とした肝心の「信仰と倫理」ということについてはごく短く触れたのみであったので、このことについても筆者としての考えを一言述べておくべきであったことに気づいたためである。

一般に書物の題名というものがどのような経緯で決まるものなのかということは筆者には不明なのだが、本書の場合、初めから題が決まっていたわけではなく、原稿が揃った時点で出版会の山本俊明氏のご意見も伺いながら、いくつかの候補の中からこの題に決めたのであった。

しかしそれは決して単なる思いつきで決めたということではない。もともと筆者の日本キリスト教史研究は日本倫理思想史という研究分野に属するものなので、「信仰と倫理」のかかわりということは、筆者にとつては改めて言明するまでもない研究の大前提のようなものであった。すなわち、キリスト教という特定の信仰に根ざす倫理思想、あるいは広く人間としての生き方を考察するということが、これまでの筆者の主たる研究テーマであった。しかし、信仰——あるいは一般に究極的なものへの態度——と倫理とのかかわりは多様であり、そもそもそれをど

のように考えるかということも決して自明なことではないであらう。そこで、同書の序章ではごく簡略にしか触れなかつたことを、改めてやや敷衍してしたためてみることにしたのである。

さて、「信仰と倫理」というとき、筆者の念頭にあることとしてまず基本的に確認しておきたいことは、信仰主体にとつての倫理とは、内的な信仰的確信が行動原理となり、具体的な行動様式として押し出されたものであるということである。信仰そのものは個人のたましいの深奥に生じる内面的なできごとであるが、それは個人の倫理の指針となり生き方に方向性を与えるものとして外化する。何らかの宗教的な回心体験が生涯の生き方の原点となつたという例は、歴史上の著名な人物ばかりでなく無名の人々においても枚挙にいとまがないであらう。

このことは言いかえれば、筆者にとつての課題は、倫理の問題をキリスト教神学の一部門として体系的に扱うのではなく、個々の信仰者における信仰と倫理とのかかわりの具体的なありようを問うことにある、ということである。等しく近代日本のキリスト者といつても彼らのキリスト教にたいする理解はきわめて多様であり、そこにはそれぞれの個性に応じた独自の世界が繰り広げられている。彼らの中には、いわゆる正統的なプロテスタントイズムの枠を逸脱する者もあるのみか、むしろ厳密な意味でプロテスタントイズムの枠内に収まる者の方が少ないのではないかと思われるほどである。(もつとも真正のプロテスタントイズムとは何かということとは、それ自体大きな問題であるが、そのことについてはここでは問わない。)とはいえ彼らはいずれもイエス・キリストによつて示された聖書の神を神として、そこに生の究極の拠り所を置いて生きた人々である。そして、そうした多様な信の世界とそこから押し出された倫理との独自のかかわりを問うことが「信仰と倫理」という表題の基本的な意味である。あわせて、そうした視点からの考察の結果開示される世界の中に、宗教的確信に生きようとする者にとつて現代に

もなお意義をもちうる創造的価値を発見することができれば、というのが本書の諸論文を作成するにあたっての筆者の基本的な願ひであった。(そうした生の活力が蓄積されて社会的な力となり歴史を動かす原動力となるメカニズムを研究することも思想史研究の一課題であろうが、同書では考察の対象を個人の生き方の場合に限った。)そこで、このような基本姿勢のもとで、具体的にどのようなことを関心と考察の対象としたかということについて述べておきたい。

第一は、同書の序章にも触れたように、信仰者にとっての生の原点は、単に知的に容認された世界観や人生観ではなく、靈性の領域に根ざす確信、すなわち何らかの意味で秘儀性を含む宗教的原体験にあるということである。このことは宗教というものの本質を知る者にとつてはすでに自明のことで、改めて言うまでもないことかもしれない。しかしながら、すぐれた仏教者の世界においては、その一見非論理的な言説の背後に宗教的体験の事実が前提とされており、ロゴス化された世界は、体験を前提として解説することで初めて十全な理解が可能となるように思われる。またキリスト教においてもカトリックの場合は信仰のもつ秘儀性や神秘性が常に肯定的に強調される。これにたいして、プロテスタントにおいてはむしろ論理的に整った概念的な世界構成が重視され、非合理的・神秘的な側面はとかく前近代的なものの残滓として切り捨てられ、積極的な関心や評価の対象となくなつたように思われる。

しかしながら、このたび近代日本の著名なキリスト者たちの世界を跡づける作業を行つて改めて気づいたことは、プロテスタントの場合にもすぐれたキリスト者として名を残している人々にあつては、知的なことばや思弁的な論理の装いをもつて表白される世界の背後には、たましいの内奥に根ざす宗教的原体験が、信仰者としての生の原点として控えているということであつた。海老名正は、熊本洋学校でL・L・ジェーンズによつてキリスト教に導

かれたが、その後再び信仰ゆえの煩悶に苦しみ、その中でひとつの啓示的な体験をもった。すなわち、二〇歳のころのある日、京都の仙洞御所をさまよいつつ祈っていたとき、突然、「神の赤子が我が衷心に誕生し居る」という自覚が彼の心中に生じた。その瞬間、それまで「忠臣義士」として神に仕えようとしていた姿勢が霧消し、「ただ神を慕う一片赤子の心のみが残った」という。そしてこの体験が、後に海老名のキリスト教世界の核心ともいうべき「神人合一」の境地を目指す生き方へと発展していく種子となったのである。

このような特異な体験はそれほど多く記されていないが、たとえば植村正久のような人物の場合も、その原点をなすものは広義の原体験的な確信であったと言えるであろう。その内容は、道義的自己の確立、彼の言葉でいえば「高尚なる品性」を自己の内に確立するという生のやみがたい希求は、イエス・キリストの受肉・降世・死・復活という啓示的な事実を通して超越的実在に触れることにより、初めて根源的に充足される、という確信であった。これは、正久幼少のころから培われた、武士の子弟としての志と道義的な厳格主義とを養分として獲得されたものであった。そうした渴望が、単なる倫理主義的な志向よりも一段と深いたましいの内奥に根ざす欲求であったことは、「植村神学」の特色といわれる独特の深い罪意識が、こうした厳しい道義的姿勢の土台の上に主体化されたものであったことをみれば明らかであろう。そして、植村がしばしば用いる「靈性」ということばは、そうした自己のやみがたい志向が生じるたましいの領域を彼なりに言語化しようとしたものであったと言えるのではなからうか。時代はやや下るが、賀川豊彦の生涯にみる超人的なエネルギーもまた、若い日の「生命の不思議を見た」という一種の神秘的体験に発しているのである。ともあれ、何らかの「靈的」な原体験を確信の根拠とし、そこから生じる生命力の横溢を活力源として生きることが、近代日本キリスト者の多くに共通して見られる生き方であった。

次に着目したいことは、倫理思想を信仰とのかわりから吟味するとき、キリスト教信仰の受けとめ方が倫理思想のあり方に反映されるという興味深い事実である。このことを内村鑑三の非戦論を例に見てみよう。

内村鑑三の非戦論といえは日露戦争の際のそれがあまりにも有名であるが、彼は第一次世界大戦下にも、「戦争廃止に関する聖書の明示」を初めいくつかの非戦の文章を書いている。日露戦争にたいする非戦論が書かれたのはアマースト大学でいわゆる第二の回心を体験してのちのことであり、十字架による罪の赦しの信仰の時代であった。これにたいし、第一次大戦の際の非戦論は、いわゆる第三の回心によって確立された再臨信仰に根ざして唱道されたものである。いまこの二つの「非戦論」に見られる論理を、それぞれの時期の信仰とのかわりという視点から比べてみたい。

日露戦争の際の非戦の論理は、しばしば言及されるようにきわめて直截明快であった。彼は言う、「余はキリスト教の信者である。しかもその伝道師である。そうしてキリスト教は、殺すなかれ、なんじの敵を愛せよと教うるものである。しかるに、もしかかる教えを信ずる余にして開戦論を主張するがごときことあれば、これ余が自己を欺き世を欺くこと」(『内村鑑三信仰著作集21』三三頁)である、と。ここには、キリスト者としての自分が開戦に反対するのはそれが聖書の教えに背くからであるという、単純なまでに明快な主張を見ることができ(ただし、この内村の非戦の論理はむしろ倫理主義とも言うべきもので、十字架信仰から必然的に押し出されたものとはいい難く、これだけでこの時期の非戦論と信仰との内的なかかわりを云々することはできないであろう。)

これにたいし、第一次大戦中に書かれた前記の文章では、戦争の根絶はいかにして可能かという問いにたいして彼は次のように答えている。「非戦はすべての場合において唱うべきである。されども戦争は非戦により、やまないのである。われらが非戦を唱うるは、これによつて戦争がやまると信ずるからではない。聖書の明白に教うると

ころに従えば、戦争は人の力によつては、やまるべきものではない。戦争は、世界の世論が非戦に傾いた時にやむのではない。また、かかる時は決して来たらぬのである。戦争は神の全能の実現によつて、やむのである。戦争廃止は、神がご自身の御手に保留したもう事業である。これは、神の定めたまひし、世の審判者なるキリストの再臨をもつて実現さるべき事である」(前掲書一一五頁)。

周知のように内村がキリスト再臨の信仰を確立するに至つたきっかけのひとつは、第一次世界大戦の勃発にあつた。人間の企てるあらゆる政治的な平和計画の挫折に絶望した内村は、戦争廃止という悲願の実現を神の全能の御手の中、すなわちキリストの再臨という究極の時に委ねた。聖書に約束されたキリストの再臨の時、すべての被造物は救われ、創造の目的に適つた完全な天地が立ち現れる、というのが内村の確信した再臨の世界であつた。戦争の完全な廃絶は人間的な努力をもつてしては不可能で、それは再臨という究極の時の到来をまつて初めて実現するのである。では人は、すべてを神の御手に委ねてなすことなくその日の到来を待てばよいのか。否、それでもなおわれわれは非戦を唱え続けねばならない、と内村は言う。なぜならそれは、バプテスマのヨハネのように、再臨の主のために道を備える行為だからである。彼が、戦争の根絶などということは人力では到底実現不可能であると知りつつもなお非戦を唱え続けることができたのは、その実現が全能者によつて保証されているという信仰に支えられていたゆえであつた。ここには、終末的な究極性を確信の根拠として、そこから不屈のエネルギを汲み上げつつ生きる信仰者の倫理を見ることができらるであらう。

こうした究極性を拠り所とする倫理的発言は、戦後の賀川豊彦の対社会的発言にも垣間見ることができらる。拙著でやや詳しく吟味したように、賀川は神を、宇宙を貫き宇宙の進化を通して己を現わす生命的な力ととらえた。そして、戦後の最晩年において、原水爆投下の体験を経た世界をなお進化の途上にあるものと希望的に受けとめ、そ

のさらなる進化・発展を「宇宙の絶対意志」としての神の手に委ねた。彼は言う、「宇宙に目的ありと発見した以上、目的を付与した絶対意志に、これから後の発展を委託すべきだと思ふ」。では人はただ拱手して宇宙の発展を待てばよいのか。続けて彼は言う、「さればといつて、なげやりにせよという意味ではない。私は、人間の意識の目ざめるままに、すべてを切り開いていく苦闘そのものに、超越的宇宙意志の加勢のあることを見いだすべきであると思ふ」（『賀川豊彦全集』一卷四五四頁）。絶対意志の自己展開のもとに置かれた人間は、なすことなくその発展に身を任せているべきではない。かえつて超越的意志の「加勢」を信じるがゆえに、彼は底知れぬ「宇宙悪」の力との戦いという果てることのない苦闘に参与することができるのである。

このこととの関連で注目されることは、超越的な力への絶対的な帰投は、超越の理解が恣意に傾くとき、ときに方向性を見誤る危険をもちらむ、ということである。そのことをわれわれは、同じ賀川の世界のうちに見る。彼は神を、「生ける大宇宙」、「大宇宙の生命」ととらえ、神と宇宙、生命の三者をほぼひとつのものとして受けとめるという、独特な神観念を抱いていたが、それは聖書との対峙から獲得されたというよりは、若い日の独自の「生命体験」に根ざし、そこから紡ぎ出されたものであった。

賀川にとって、この「宇宙生命」は神の意志の顕現として限りなく進化・発展すべきものであった。そしてその宇宙目的の成就の過程に、「狂い」が生じるのが「悪」であることとらえられた。すなわち賀川にとって悪とは、神の力に抗いその貫徹を阻む力であるよりは、むしろ「生命としての神」が自己発展していく途上にはからずも生じる一種の負の状態と受けとめられていた。具体的には、精神的・知的障害や各種の疾病などのみか、老衰や死亡までが悪として列挙されている。「生命」そのものを完璧な理想と見立て、疾病や心身の各種障害を「悪」と受けとめるという思想は、誤解を恐れずに敢えて言えば、発想の基本的なパターンとしてはナチスの優生学とも重なること

ろがあると云わざるをえないであろう。(序でに言えば、現在差別として厳しい批判にさらされている賀川の諸発言は、こうした思考様式に発したものであると言えるのではなからうか。)ただしその際、賀川の活動がその悪を排除する方向ではなく、これをイエスの贖罪愛への参画を通して克服する方向に向かったことは、改めて言うまでもない。

終りに、信仰者としての実践的な意図として、こうした先人たちのさまざまな信仰的倫理の中に、現代に生きるキリスト者にとってもなお意味をもちうる指針(ときには反省材料)を探りたいということがあった。たとえば、筆者の個人的な関心事のひとつに、価値観が多元化していく現代にあつて異なる価値観に生きる人々同士がいかに共存していくかという問題がある。二一世紀がどのような価値観の時代になるのかという壮大な見通しはさておくとしても、キリスト教的唯一神を統一原理とする価値体系に素朴無批判に安住していられた時代はすでに過去のものとなり、多元的な価値観の林立する中で共存の道を探らなければならない時代が到来することは明らかであろう。それは筆者にとっては、民族や国家という大舞台における課題であるだけでなく、信仰や価値観を異にする周囲の人々といかにして真実の交わりを築いていくことができるかという、きわめて日常的個人的な課題でもある。あるいはまた、死の問題とどのようにかかわっていくかということも、高齢化する社会にとっての不可避の課題であるとともに、筆者を含め万人にとつての切実な課題でもある。そして、内村鑑三が聖書に拠りつつこうした課題と対峙して苦闘の末に編み出した答は、同種の課題を抱える現代のキリスト者にも十分な示唆となり得るものであった。また植村正久が武士の子弟としてのエートスを土台としつつそこにプロテスタント的信仰を主体化した生き方は、日本人としてのアイデンティティを重んじつつキリスト教信仰に生きようとする者にとつて、重要な指針を与えてくれるものであった。

しかし本書の各論文の作成にあたっては、必ずしも初めからある課題を持って対象に臨んだわけではない。逆に、研究対象と虚心に向き合ううちに、対象の中の珠玉が思いがけずその姿を現わし、その中に現代人も共有し得る課題への道標を発見したというのが実感である。こうしたことが可能となるのは、ひとつには、このような生にとつての基本的な諸課題は時代や社会を超えた普遍性をもつためであり、かつ研究対象のもつ世界が深ければ深いほど、それは、いかなる時代や社会の人々の課題にたいしても相応の深さと重みをもつて応えてくれるためであると考え

る。

最後に、宗教的信仰に根ざす倫理に生きようとする者が心すべきこととして、考えるところを一点述べておきたい。それは、宗教の倫理というものは、基本的にはあくまでもその信仰に生きる個人とその感化力を通して働くきにのみ、真に意味をもつものとなることである。言いかえれば、ある信仰者の倫理的確信は、そのまま一般的な倫理的規範や社会倫理の原則とはなり得ないということである。なぜなら、宗教的体験と確信に根ざし、それらを活力源とする倫理には常に福音的な自由があるが、それがひとたび体験という基盤から切り離され、権威をもつて一人歩きを始めるとき、それは最悪の場合には律法主義にも陥りかねないからである。

拙著で取り上げた近代日本のキリスト者たちは、キリスト教の受けとめ方はそれぞれの個性によつて異なるが、いずれもイエス・キリストにおいて開示された神の愛を究極の実践原理として生きた人々である。しかし、彼らを敬愛しその後に続こうとする者が、先人たちの体験的基盤から切り離されて規範化された彼らの倫理思想を権威として奉じようとするなら、その姿勢は一步を誤れば形骸化した「律法」の遵守となり、最悪の場合、そこには律法同士の争いさえ生じかねないということを、常に心しておかねばならないであろう。

もう一点、言うまでもないことながら一言つけ加えておきたいことがある。それは、拙著で信仰と倫理の問題を

個々の信仰者に焦点を当てて取り上げたということは、決してキリスト教倫理をそれ自体として構築し唱道することの無意味を主張するものではない、ということである。たとえば政治や環境、生命倫理など、すぐれて現代的な倫理上の課題にたいし、キリスト教の立場から積極的に発言していくことは、それ自体きわめて重要なことであり、キリスト者のみならず一般の人々も大きな関心と期待を寄せているところであろう。拙著で問題を個人の信仰という視点から取り上げたのは、基本的にはそれが筆者の長年の関心事であったことによるが、より積極的に、こうした研究成果が個々人の信仰生活への指針として、何らかの意味を持ち得るであろうと考えるからである。あわせて、一研究者としてこうした日本キリスト教史上の珠玉を発見しその価値を外の世界に向けて発信していくことは、日本のキリスト教の世界のキリスト教史への創造的な参与を跡づける作業ともなり得るであろうと考える。